の後の政変もあり、彼の立場は微妙なものとなり、再度日本に来ることになりましたが、国の体制如何によっては、麗澤海外開発協会のその後の展開も違ったものになっていたかも知れません。しかし、協会設立以前から日本とラオスで何かとパイプ役を果たしてもらった彼とは、今日までご縁が続いています。

ラオス産業の開花を願って

私は1969年から74年までに2度、一時帰国をしましたが、ラオス養蚕開発に微力ながら足かけ5年携わることができました。この間、「開発途上国において文化･経済の発展に協力する」という協会の設立趣意にどこまで忠実に実行できたか、今改めて振り返って自問自答してみると多くの反省材料が思い浮かんできます。

廣池千太郎会長（当時）からは、「慌てても結果がすぐに出るようなものではないんだから、長い目でじっくり取り組みなさい」と激励をいただき出発したものの、少し結果を急ぎすぎたかも知れません。高度の農業技術を持ち合わせた人が必ずしも開発事業にふさわしいとは限りませんが、我々には、技術に裏打ちされた戦略に少し欠けていたかも知れません。

我々の活動がラオスの産業開発への導火線となって華々しく開花する、というのは大きすぎる夢でしたが、池田氏から始まって、それに続いた何人かの情熱と麗澤の物心両面から支えてくださった精神がラオスのどこかに生きているとしたら、これ以上の喜びはありません。世界のニュースの中でもあまり報道されない小さな国ラオスですが、平和で、争いのない安定した国家になっていくことを願ってやみません。

ラオスの国花
プルメリア

第２章　コスタリカにおける支援事業

豊かな海岸
――コスタリカ共和国

地図を広げると、メキシコの南端から南米大陸に向けて、ちょうど象の鼻のように伸びた細長い陸地が続いています。この南北両アメリカ大陸をつなぐ回廊が、いわゆる中央アメリカ地峡です。コスタリカは、中央アメリカ南部に位置する共和制国家で、北はニカラグア、南東はパナマと国境を接しています。

《現在のコスタリカ事情》（2021年11月現在）

●コスタリカ共和国

1. 面積：5万1,100㎢（九州と四国を合わせた面積）
2. 人口：約509万人（2020年、世界銀行）　3. 首都：サンホセ（標高1,200m）
4. 民族：ヨーロッパ系及び先住民との混血が多数、中南米系（ニカラグア系、コロンビア系、ベネズエラ系）、ジャマイカ系、先住民系、ユダヤ系、中国系
5. 言語：スペイン語　6. 宗教：カトリック（国教、ただし信教の自由あり）
7. 政体：共和制　8. 通貨：コロン（₡）
9. 主要産業：農業（バナナ、パイナップル、コーヒー等）、製造業（医療器具）、観光業
10. GDP（名目）：603億ドル（2020年、コスタリカ中央銀行）
11. 一人あたりGDP：11,106ドル（2020年、コスタリカ中央銀行）
12. 主要貿易品目：（1）輸出：医療機器、バナナ、精密医療器材、パイナップル等
（2）輸入：医薬品、衣類、石油製品、自動車、軽油等（2020年、貿易振興機構）
13. 主要貿易相手国：
（1）輸出：米国、オランダ、グアテマラ、ベルギー、パナマ
（2）輸入：米国、中国、メキシコ、グアテマラ、ドイツ、マレーシア、日本
（2020年、コスタリカ統計・国勢調査局）
14. 主要援助国：
（1）日本（48.74）（2）ドイツ（11.66）（3）米国（10.53）
（4）フランス（4.38）（5）カナダ（1.09）
（2018年、支出総額、単位：百万ドル）
15. 在留邦人数：351人（2021年10月現在）
16. 在日コスタリカ人数：206人（2020年12月現在）

コスタリカ国花のラン

サンタアナ農場の入口から奥を見る

サンタアナ農場の入口にて（1986年）。派遣スタッフの大野裕朗氏（右）白木和彦氏（左）

サンタアナ農場に建てられた研究室

［1］ 事業の目的

事業は、中米コスタリカ共和国の首都サンホセ州サンタアナ市に花卉園芸センターとして農場を建設し、カーネーションのウイルス・フリー苗（無菌苗）の培養と切花栽培および事業地域での適性品種を選定することを目的としました。また、この過程を通じてウイルス・フリー苗の育苗技術ならびに切花栽培の確立と同時に、その技術を周辺農民に普及し、コスタリカ共和国の花卉栽培技術の向上・発展と花卉産業の振興に寄与することを本事業の目的としていました。

当時、カーネーションは世界的にウイルスによる汚染が著しく、苗や切花の出荷にあたってウイルス・フリー苗が要求されていましたが、中南米においては、まだこの苗が作られていませんでした。事業開始3年を目途に、苗からの切花栽培を進め、それらの苗や切花を米国、中南米諸国、ヨーロッパへ輸出することを目標としました。また、事業の進展にともない、観葉植物や多種にわたる花を栽培、販売することを計画したり、技術援助としてコスタリカ人にこれらの技術を普及したりと、日本や米国で研修を行いながら、同国の経済開発の一助たらんことをめざしました。

［2］ 事業の概要

1 サンタアナ第1農場

1978年、現地法人のレイタク・コスタリカ株式会社を設立し、翌年、サンホセ州サンタアナ市コンセプションに約3.3haの農場を建設し、次の事業を行いました。

① カーネーションのウイルス・フリー苗の培養と切花栽培。

② カーネーションの新品種をアメリカ、ヨーロッパから導入。土壌試験、肥料試験、病害虫試験、温度、湿度などの適性品種を選定。

③ ①②を通じて現地に適合するウイルス・フリー苗の育苗技術ならびに切花栽培技術の確立を図る。

④ これらの技術を周辺農民に普及し、コスタリカの花卉栽培技術の向上・発展と、花卉産業の振興に寄与する。

⑤ 企業としての事業運営を図るとともに、コスタリカの花卉栽培の向上・発展と花卉産業の振興に寄与することを目的としたガーデンセンターの開園。

研究室ではカーネーションの無菌苗の研究を行った

サンタアナ農場における母の日の売店イベントの飾りつけ（1981年）

2 アラフェラ第3農場

1982年、湿地帯で花卉栽培に適さなかったエレディア州オルケタ地区サラピキ第2農場を売却、アラフェラ市ロブレ地区に第3農場を建設。事業計画の一部変更を国際協力事業団へ申請し、次の事業を行いました。

① コスタリカ原産の観葉植物の生産。

② アメリカ、オランダ、ドイツ、イタリアへの葉物輸出事業。

③ 日本へのドラセナ（幸福の木）コンテナ輸出事業。

［3］ 事業の経過

1 レイタク・コスタリカ株式会社設立までの経過

1977年秋、当協会の藤村義朗理事が、米国サリナスの内田善一郎氏と三重県津市の赤塚充良氏から「中米コスタリカにおける協会の事業として、花の栽培が有望である」との報告を受けました。1978年、協会の理事会で協議の結果、これを検討することとなり、長谷虎治副会長、藤村義朗理

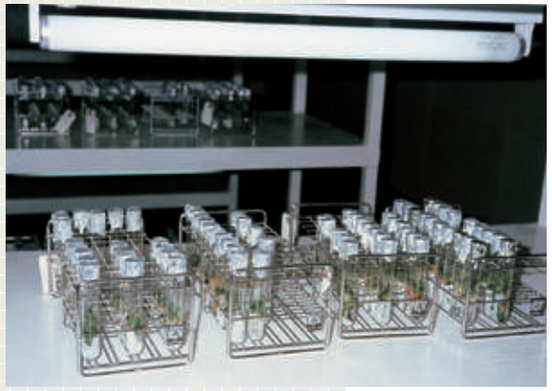
サンタアナ農場では、植物栽培のほか国内向け植物売店も営業していた

日本とアメリカからの来訪者を迎えて、
エル・ロブレ農場の事務所にて

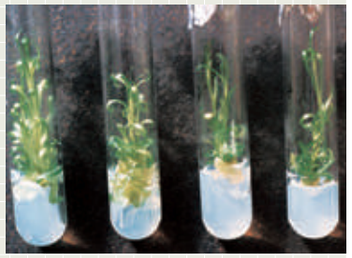
事、岩坂喜一理事等による調査団が現地に派遣されました。

その後、数次にわたる調査の結果、廣池千太郎会長の許可を得て外務省や農林省に諮り、国際協力事業団による融資を受けて本事業を行うこととなりました。そして、国際協力事業団から官民合同によるコスタリカ花卉園芸基礎調査団が派遣され、細部にわたる調査が行われた結果、コスタリカにおける花卉栽培は非常に有望であるとの調査報告が提出されました。

この調査報告を受けて、当協会では、コスタリカ共和国で農業、花卉栽培の技術援助を目的に、レイタク・コスタリカ株式会社を設立することに決定しました。社長には長谷虎治氏、副社長に藤村義朗氏と赤塚充良氏、専務に岩坂喜一氏と内田善一郎氏が任命されました。資本金230万コロン（5,000万円相当）のうち140.3万コロン（3,000万円相当）を当協会が出資、残額は後援団体のモラロジー研究所維持員の有志者によって出資され、1978年9月5日に設立登記を完了しました。ここに当協会は、当時の寄付行為第4条（目的）に記載するように、人材の育成と技術指導を通じて世界の平和、人類の安心と幸福に寄与することを目的として、道徳的指導も併せて行い、日本とコスタリカ両国の親善と繁栄に努力することとなりました。



カーネーションの無菌苗



カーネーションの無菌苗

② 花卉栽培事業の経過

現地法人のレイタク・コスタリカ株式会社設立後、サンタアナ市に3haの農場用地を購入して、国際協力事業団に「花卉栽培試験事業」の申請を行い、融資の承認を得て現地法人の事業資金に充当してきました。1981年7月にレイタク・コスタリカ株式会社サンタアナ農場施設が完成し、事業を開始しました。当時、コスタリカと条件のよく似た隣国コロンビアではすでにカーネーションの栽培が始まっていて、世界最大の産地となっていました。年間を通じて無加温栽培が可能で、このカーネーションは日本へは年間100万本以上が空輸されていました。この数字から考えて、コスタリカにおける花卉産業は、将来その発展が大いに期待できると考えられました。また、これによる収益は、現地はもちろん、海外モラロジー開発の源泉になることも視野に入れ、日本や米国への輸出を目標に事業展開を進めました。

売店がオープンした当時（1981年）

また、一方では、温室の一部におけるコスタリカ国内販売用の売店を整備するため、日本から輸入したサボテンやコスタリカ国内各所から仕入れた花卉園芸植物の栽培も開始し、7月25日に農場施設の完成と販売店のオープンを記念する開場式を行いました。式には日本からの役員、廣池英二郎氏ご夫妻、岩坂喜一氏、大野裕朗氏、永田定吉氏ご夫妻等を迎え、コスタリカ駐在の日本人や現地の著名人を招いてのセレモニーとなりました。

売店がオープンしたことを知らせる
地元紙の広告（下の半分）

農場開場後も温室内の植物栽培を行い、さらに12月には隣接するアラフェラ市に9haの農場用地を購入して観葉植物の栽培も開始しました。この間、当協会からは用地購入資金を投じ、人材を派遣するとともに、国際協力事業団からは3年間にわたって毎年1名の専門家を派遣していただき、中心事業であるカーネーションのウイルス・フリー苗の生産技術を確立することができました。

アラフェラ農場

しかしながら、ウイルス・フリー苗の組織を培養した母

アラフェラ農場

アラフェラ農場には倉庫、事務所のほか、輸出植物をパッキングし、ショッピング時まで保冷する冷蔵庫も完備していた

株にウイルスが発生してくる時間的要素が、コロンビアに比較してかなり早く、経費が増大し、経営上はきわめて不利でした。ウイルス・フリー苗の流通についても、世界的大産地であるコロンビアでは、カーネーション栽培以来10年を経過してウイルス病が発生し始め、ウイルス・フリー苗の自家生産を行うことになり、当初に計画したコロンビアへのウイルス・フリー苗の輸出の道が絶たれました。切花栽培にあたっては、生産体制の遅延に加え、品質的に輸出商品として競争力を具備するにいたらず、当初計画したカーネーションの量産体制と輸出事業を断念し、全面的に観葉植物の栽培と輸出事業に計画を変更せざるを得ませんでした。カーネーションのウイルス・フリー苗の栽培適地としてすすめられていた第3農場用地の取得も、コスタリカの気候に適した植物の栽培を考え、観葉植物の栽培に適した土地にしぼられていきました。そして、1982年後半からは、ドラセナ（幸福の木）を中心とした観葉植物の日本向け輸出事業を行うことになりました。

3　観葉植物栽培事業の経過

ロブレ第3農場の建設後は、サンタアナ第1農場との2農場体制を確立し、コスタリカ国内向け花卉栽培と販売、海外市場向け観葉植物の栽培と輸出を中心に事業を行ってきました。国内向けに温室でカーネーションやガーベラ、ポインセチアなどの植物を栽培し、それらの植物を売店で販売しました。また、コスタリカ産のドラセナ（幸福の木）を、当時、観葉植物がブームになっていた日本へ輸出できないかと考え、その道を切り開きました。このドラセナはサンタアナの土地で栽培しやすい植物であったので、カーネーションと比べて大量生産・大量輸出が可能でした。

コンテナによるドラセナの日本への輸出事業は大成功をおさめ、1984年には、これまで赤字が続いていたレイタク・コスタリカ株式会社の決算が初めて黒字となるほどの収益をもたらしました。そして1986年には年間輸出高が100万ドルを突破し、コスタリカ国内における植物輸出高ベスト15にランク付けされるまでに至りました。また、これまでアメリカを中心に行ってきた葉物輸出の市場拡大をめざし、ヨーロッパ各地への営業活動も行ってきました。その結果、農場内で生産した植物の品質が高く評価され、オランダ、ドイツ、イタリアなどへの輸出事業が展開されました。

アラフェラ農場にて、コスタリカ駐在の小野大使夫妻（左から3人目と4人目）とともに

このように、現地原産または現地生産の植物を海外に輸出して外貨収入の道を開いたことは、現地法人設立の目的である「対外経済協力および技術援助」の上からも非常に意義深いことでありました。輸出事業が成功をおさめた後も、植物の品質管理、農場施設の充実、輸出市場の拡大、人材育成に力を入れて事業を推進してきました。

ディフェンバギアの鉢上げ

4　コスタリカにおける事業の中止

当協会は、現地法人のレイタク・コスタリカ株式会社の設立以来、13年間にわたってコスタリカにおいてサンタアナとアラフェラの2つの農場を経営し、花卉園芸植物の国内販売と日本への輸出販売を行い、一時期はコスタリカにおける植物輸出高ベスト15にランク付けされるに至りました。

しかし、レイタク・コスタリカ株式会社の事業は、継続的に日米欧に営業を続け、市場の開拓をする必要がありま

輸出用ポトスのベッド
（サンタアナ農場の第1湯室にて）

した。そして、それ以上の事業展開のためには多額の再投資と人材の継続的派遣が必要でした。

そこで、1991年6月、当協会役員4名が現地を視察した結果、再投資によるそれ以上の事業の拡大は困難であり、併せて13年間にわたって展開してきた事業の経過を踏まえて、協会がコスタリカへ進出した使命は達成されたと判断しました。出張した役員は帰国後、協会の理事会にて、レイタク・コスタリカ株式会社の事業を閉鎖し、農場用地と施設をコスタリカの公的機関へ寄贈することを提案し承認されました。

その後、在コスタリカ日本大使館に事情を説明し、ご指導を得て、コスタリカ政府へ農場用地の寄贈を申し出て、サンタアナ農場はコスタリカ大学農学部の研究施設とし、アラフェラ農場はアラフェラ州の公的施設として使用していただくことになりました。その後、1991年11月7日にコスタリカ大学へ、11月9日アラフェラ州への贈呈式が現地にて開催され、コスタリカ大学のガリタ・ボニージャ学長およびルイス・プリモ副学長、コスタリカのアーノルド・ロペスエチャンディ副大統領から廣池幹堂会長宛に感謝状を頂きました。

日本から輸入したサボテン

以上のように、1978年9月にコスタリカの現地法人として設立されたレイタク・コスタリカ株式会社は、「対外経済協力および開発途上国への技術援助」という当協会の目的に沿った十分な成果を残して1991年（平成3年）をもって閉鎖され、当協会によるコスタリカでの事業を全面撤退することとなりました。

［4］ 事業の成果

研究所西側

コスタリカにおける花卉栽培事業を、当協会は15年間にわたって行ってきました。カーネーションの無菌苗栽培では、際立った研究成果を残すことはできませんでしたが、観葉植物の輸出事業では、コスタリカ国内での新たな輸出事業として大きな成果を残すことができました。特に観葉植物の輸出事業においては、アメリカ、ヨーロッパに加えて、新しく日本への輸出販路を生み出し、コスタリカ国内の花卉産業に革命を起こしました。レイタク・コスタリカ株式会社が、コスタリカ国内に新しい外貨収入の道を切り開いたといっても過言ではありません。その後、コスタリカ国内にも同じように輸出事業を営む企業が続出したことからも、ここに当協会の「人材育成と技術指導」面の目的は達成されたと言ってよいでしょう。

サンタナ売店の内部

コスタリカでの15年間は、コスタリカ国内での輸出産業の確立という大きな成果を残したと同時に、開発援助が抱えるジレンマに直面した時期でもありました。そして、再度、援助のあり方を検討する機会が得られ、海外における事業は行わず、開発途上国へ派遣する人材の育成を活動の基盤とする方針が再確認されることになりました。「開発援助の基本は人材育成である」という援助の核となる、しかし見落とされがちなこの意義を再確認できたことこそ、コスタリカにおける事業の最も大きな成果ではないでしょうか。